

大衆文化の視覚イメージにおける記憶の伝達

尹 賢鎮 (延世大学校中央博物館学芸員)

大韓民国全羅北道群山市には1923年造の‘朝鮮銀行’の建物がある。この建物は当時の京城(現ソウル)以外の地域では、目にすることができないほど立派な建物であったという。この建物の設計者は第一次世界大戦(1914年)中、捕虜になったドイツ人で、施工者は中国人であった。このこと自体が当時の東北アジアの政治状況を物語っている。以前、記録写真を撮るためにこの建物に立ち寄った際、私が目にしたのは舞踏場としてすっかり様変わりし、撤去直前という状況にあるその建物であった。この時の記憶から私の日本研修は始まったのである。

今回の日本研修中、私は‘記憶’という一つの単語に始終、悩んでいた。大衆文化の視覚イメージを研究する者として私は、その時代を生きた人々と、その時代の人々の日常生活を特徴づけた視覚イメージとの相関関係に注意を払ってきた。基本的には、大衆のもつ視覚イメージは、個々人の自由な趣向によるものではなく、他者の視線を意識する個人によって構成された集団的選択である。それはその集団を導く少数の権力者によって選ばれたものが主である。そのため、大衆視覚のイメージが作り出される過程を反対側から観察してみると、その時代を動かしていた権力の、抽象的ではない具体的な姿を見出すことができるわけである。

私は横浜にある‘赤レンガ倉庫’を見ながら、過去の建築空間の記憶が今日まで受け継がれている柔軟な姿勢に、漠然と羨ましさを感じた。大正時代の港町にあった平凡な建物が今の時代に自然に溶け込んでいることも驚きであったが、それを可能にした‘記憶の選択過程’がさらに羨ましかったのである。同様に‘日本丸メモリアルパーク’を訪れた時には、私は「日本人よ、あなたたちはなぜこんなに記憶に繋がる近代の風景を多く残しているのか」としか言い様がなかった。

他人の見た幸せな夢の話聞いても、その夢は自分のものにはならない。言うまでもなく夢は各個人の経験が違う形で現れるからである。結局、記憶も同じ原理で、自分と他人が分離されるものである。自分の空間にいくら優れたものが持ち込まれても、それが自分の意思でない場合には、自分の記憶とは無関係な形で位置づけられるだけである。

明治43(1910)年に始まり、大正を経て昭和20(1945)年に至る間、韓国人は、他人の記憶を移植されてきた。それこそが前述の朝鮮銀行に対し人々が愛情をもって記憶することができなかった根本的な理由であろう。寸法の合わない服を着て楽に感じる人がいるだろうか。

一方、現在横浜にある建物はその当時を生きた日本人の創造物であり、日本丸もその当時の日本人の記憶を伝える文化遺産である。こうした記憶が受け継がれているという事実だけでも、韓国から来た私には、現在の日本人が羨ましく感じられたのである。

わたしが学芸員として勤めている延世大学校中央博物館は、学校教育事業の一環として1929年にソウルに設置された。その後大学創立百周年を機に記念館が建てられ、常設展示室を始めとした施設が設けられ、現在は韓国の大学博物館において最大規模の総合博物館として発展しつつある。

博物館の主機能は、‘人々の共通の記憶’を保管・記録・展示する場所だと思うが、今回の日本研修によりもう一つの要素を加えることができた。それは‘記憶の発見’である。博物館の仕事とは、具体的な時代の区分と遺物の発掘にある。一方、‘記憶の発見’とは、より‘有機的’且つ‘相対的’な立場で歴史を顧みることを意味する。今後、それは‘記憶喪失の時代’を生きた近代の韓国人達を研究する上での基本的な姿勢となるだろう。

旅先で‘違い’を発見するのは当然だが、その違いによって自己発見ができたなら、よりラッキーなことだ。今回、こうした幸運な時間を与えてくださった神奈川大学21世紀COEプログラムと、関係者の皆様に、感謝の言葉を申し上げたい。

(尹 賢鎮氏は2004年12月6日～19日、訪問研究員として来日された。)

印刷博物館の図録「西洋が伝えた日本 日本が描いた異国」の表紙
(2004年9月11日～12月12日開催)

